カブ通信（新年号）
～耐寒ハイク（長尾の里）
＆スケート訓練（子供の国）～

Ｎｏ：４　平成２３年　１月３１日発行
川崎第４６団カブスカウト隊
発行責任者：久保井隊長、執筆：北村副長

新年のご挨拶

久保井カブ隊長からのメッセージ

新年おめでとうございます。

本年もスカウト達のため、一所懸命に頑張りたいと思いますので、何卒ご協力のほど宜しくお願い致します。

さて、カブ活動（カビング）は、スカウティングが始まって９年後の 1916 年、今から 95 年前に「Wolf Cub's Handbook」の発刊をもって誕生しました。ウルフ･カブという風変わりな名前を付けた由来をB.P(ベーデン・パウエル卿）はこう言っています。「立派なスカウトの事を、アフリカの部族の中ではオオカミと呼んでいる。君たちは立派なスカウトになる子供だから、オオカミの仔（ウルフ・カブ）なのだ。」と。この着想が、ノーベル文学賞を受賞した文豪ラドヤード・キップリングの傑作であるオオカミを主題とした「ジャングルブック」（The Jungle Books）のストーリーと結びつき、「Wolf Cub's　Handbook」が生まれました。ディズニーのアニメにもなり、そのストーリーは、シア・カーンという年老いたトラの悪だくみをオオカミに育てられた少年モーグリが森の動物の仲間と一緒に打ち破るという愛と冒険の物語です。是非、機会があればご覧頂ければカビングの理解につながると思います。

昨年の寅（トラ）を追い払って卯（ウサギ）がやって来る。ウサギは、カブ隊の最初の進級課程です。正にうさぎ年はカブ隊の年と言っても良いのではないでしょうか。そんなうさぎ年を迎えるに辺り、今年の抱負を書かせていただきます。

『１．ご父母の皆様とより一層のコミュニケーションを図ります。』

年末の父母会でもお話しました様に、カブスカウト世代は残念ながら自分で判断して行動したり、指導したりという事を十分に出来ません。よって成人の支援が不可欠な年代なのです。我々指導者として活動を展開しているわけですが、月に数回しかスカウトに接する事ができません。つまり、カビングを推進していくには、ご家庭と共同作業で「やくそく」と「さだめ」の実践をしていく必要があるのです。そのためには、我々指導者とご父母との間に密なコミュニケーションが必要だと考えます。一方的なコミュニケーションではなく、双方向のコミュニケーションを図っていきたいと思います。また、オフ会も含め忌憚なく意見交換が出来る機会を増やしていきたいと考えています。

『２．ウルフ・カブを育てます。』

残念ながらカブ隊には、ボーイ隊にある「菊」、ベンチャー隊にある「富士」というものがありません。そういう事から都市伝説として、チャレンジ章をすべて取るという「スーパーカブ」がそれにあたると考えておられる方がおられます。それは決して間違っているわけではありません。しかし、カブ隊の最高の賞、ウルフ・カブとはカブ隊の「やくそく」と「さだめ」を覚えるだけでなく、理解する事なのだと考えています。そして、これから行うボーイ隊以上の「ちかい」と「おきて」を宣誓する意味を理解するスカウトだと（私は）思っています。こんなスカウトをこれからも育てていきたいと思っています。

『３．指導者として自己研鑽します。』

１、２を実践していくためには、指導者自身がこれまで以上のスカウティングの理解と実践をしていかねばなりません。スカウト教育は 100 年が経ち、より洗練された体系化が行われています。指導者はこれらをよく理解し、実践に向けて研鑽していく必要があります。スカウトから見るとゲームであっても、指導者側では集会の目標とねらいとよく検討し、どう実現していくかを考え、安全に配慮しながら実施していく。このための研鑽を指導者全員で実施していこう、いきたいと思います。

長々とご挨拶を書かせていただきましたが、すべてはスカウトのため、よりよき社会人を育てたいとの気持ちです。皆様とご一緒に頑張りたいと思いますので、本年もよろしくお願い致します（久保井隊長）。

耐寒ハイク

～サインを追うて、野鳥観察～

１月９日、今年は昨年までと思考を変えて、先月までの巣箱作りやバードコール作りを活かし、野鳥観察も取り入れたハイキングを実施しました。コースは向ヶ丘遊園駅から等覚院～緑化センター～二ヶ領せせらぎ館～登戸駅までの約７ｋｍ。早朝７時に遊園に集合。さすがに半袖の制服だと寒さが堪えましたが、防寒着を身に付けた時に暖かさを感じて有難みを感じることも実感できたと思います。世の中には洋服を買ってもらえない子

供達がいますので、ぜい沢をしない生き方というのはおきての実践そのものなのです。

さて、ちょうど日の出から 30 分ほど経過した7時 15 分に駅を出発。旧モノレールの橋脚があった道に出ると、ちょうど真正面から太陽を浴びました。真冬は陽射しの温かさを特に意識をしませんか？

また、この日の活動は４８団のカブ隊との合同集会となりました。聞けば、カブスカウトが一人しかいないとのことで、組集会と隊集会の組立てにより成立つ本来のカブ隊の活動が難しい現状なのです。ちょうど、先月の地区のラウンドテーブル（部門毎に隊指導者が集まり、文字通り円卓になりながら、お互いの悩みや情報交換を通じて、隊の活性化に資する会議。地区の各部門の担当コミッショナーが概ね２ヶ月に１回開催）の帰り際、今津隊長から依頼されました。当団も理想の数（６人/組×４組＝24 名）には及ばない状態ですから、スカウトの意識の向上にも寄与できると考えての運びとなりました。

等覚院（とうがくいん）での般若心経

つつじ寺として有名な宮前区神木本町にある真言宗のお寺です。昨年の下見の際、御住職にスカウトに話をして欲しいと依頼し、快く引き受けて下さいました。低学年の小学生が真冬の早朝に、遊園から歩いて来たことにびっくりされていました。

住職から般若心経の話を聞き、一緒に唱えました。カブのスカウトにとってはちょっと難しい体験だったと思いますが、振り仮名付で意味は理解できなくても、歴史や自分の人生を考えるきっかけになれば良いのです。足がしびれたスカウトや保護者もいましたが、約 30 分間、正座をして姿勢を正した体験や唱えるためにお腹から声を出す呼吸法の利点も生まれた時間となりました。

矢印の方向へ進め。×には行くな！

次は、追跡サインにより組ごとに移動。突如「→」の方向を示したサインを追って進めとの指令が下り、敷地内の雑木林の中を通り抜けて、多摩区と宮前区の区境の道路に出た後、近くの五所塚第１公園まで進みました。昨年は赤いテープの目印や追跡サインをカードにしたハイキングを実施しましたが、今回は本物を使って、自然に触れることを体験させたく、落ちている枝だけを使ったリーダーとスカウトを結ぶ秘密のサイン（伝言）となりました。

ところで、五所塚という地名～この公園内に直径４m、高さ２m程度の５つの塚があるのが由来とのことです。私達の活動拠点駅の生田は、昭和 39 年以前は東生田と呼ばれていました。地名や駅名の由来を調べてみると新たな知識が膨らみ、また歴史の勉強にもなります。

ロープを使った爆弾運び！？

公園では、引きとけ結びだけを使って爆弾に見立てた色水が入ったペットボトル運び競争を行いました。一人ひとりが結びを作り、片方のロープを一斉に引き合うことで、ロープの結びがしまり空中に浮かせて運ぶルールです。途中での落下や不時着は爆発して汚染物質が散乱してしまうとの想定で、いち早く結びを作って、“爆弾”を指定された場所に早く無事に置いた１組が優秀となりました。次回はもっと大きな物を運ぶゲームや、結びをもやい結びにして難易度を高めるゲームを考案中です。ゲームを通じてロープ結びを学ばせるように、体験から学ぶボーイスカウト活動の醍醐味がここにあるのです。

今年の目標は何？

公園からは近くの妙楽寺（あじさいで有名なお寺です）に移動し、各々の今年の目標を短冊に書きました。「チャレンジ章をたくさん取る」、「隊活動に頑張って参加する」、「元気一杯頑張る」、「言葉使いに気をつける」などを宣言しましたので、達成できますように保護者の方々の御協力もよろしくお願いします。自宅の机に飾って、いつでもふりかえられるようにして下さい。

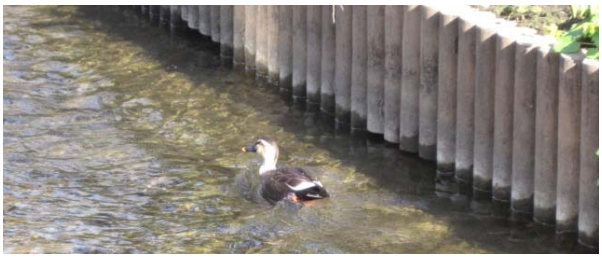
緑化センター経由でせせらぎ館へ移動

途中、新宿副都心を始めとした都内方向の視界が開けた所では、話題のスカイツリー（高さ 634m：ムサシ）も肉眼ではっきりと確認できました。既にピンク色をした梅も開花した民家もあって、春の訪れが待ち遠しいです。そんな発見・気づきをスカウトは体験しました。

緑化センターは川崎市の施設で、多くの高木や植物が観察でき、また、敷地内を二ヶ領用水が通っており、水と緑の憩いの場としても親しまれている多摩区にある貴重な財産の一つに上げられています。残念ながらこの時期は寒さが厳しく「椿」など限られた花しか見られませんでしたが、暖かくなれば、桜やこぶし、藤などが見られますので、何かの機会に再訪したいと思います。

センターからせせらぎ館までは、二ヶ領用水の水面上に架けられたデッキの上を上流に向って進みました。特に宿河原の界隈は、二ヶ領用水沿いに植えられた桜を地域の方々で手入れを行い、自分達のものとして大切に後世に受け継いでいく活動が認められ、国から表彰された経緯があります。桜を通じて住んでいるまちに愛着を持ち、企業も協力して取組む活動を展開する力には敬意を表したいと思いました。当団は、地域奉仕活動と称して、毎月第３日曜日に育成会が主体となって実施している三田第１公園や団行事の生田駅周辺での清掃活動、そしてバス停にベンチを設置する取組を行っておりますが、やはり継続的に行って、社会への貢献に寄与していくことが大切だと思います。

途中、大きな鯉がゆったりと泳ぐ姿が見られたほか、



白鷺やカモに遭遇し、敏捷性ある動きには圧倒されました。

多摩川では 60 羽を超える白鷺以外に、カモや鳩の観察もできたとスカウトから報告がありました。バードコールを使って野鳥と会話する試みができるように自宅周辺でトライして欲しいです。

くま訓練

耐寒ハイクの終了後、くまだけの特別訓練を多摩川で実施しました。昨年秋から月１回実施している手旗訓練を行い、自分のフルネームが打てるまで進み、デンコーチの見本もスカウトの刺激になりました。訓練最中に多摩川でのボヤ騒ぎがあり、消防車が 10 台近く駆けつける騒ぎがありました。ちょうど、対岸での騒ぎで当然ながら声では届かない距離となるため、手旗を使えば対岸との交信が容易にできます。家庭で鏡に対しながら練習するなどして、身体を使って表現する醍醐味を経験させたいものです。

川崎市へ募金を寄贈（続報）

先月 28 日に、川崎区の団（3・21・30 団）に所属する代表スカウトが、阿部孝夫川崎市長に川崎地区で集めた募金（1,057,438 円）を寄贈しました。翌日の神奈川新聞に記事が掲載されましたのでご紹介します。

「困っている人に」

ボーイ・ガールスカウト市に募金125万寄贈

日本ボーイスカウト川崎地区協議会（木村耕三会長）とガールスカウト川崎市連絡会（小林美洋子会長）が、街頭でのボランティア活動を通じて募金124万9438円を集めた。代表の子どもたち20人が28日、川崎市役所を訪れ、阿部孝夫市長に募金を寄贈した。

同連絡会は300人のメンバーが活動している。12月に入ってから、子どもたちは街頭や私鉄沿線の各駅に立って、募金活動を開始。ボーイスカウトは105万7438円、ガールスカウトは19万2千円を集めた。

ボーイスカウトの斉藤鼓太朗君（9）は「いっぱいお願いして呼びかけて大変だったけれど、思ったよりたくさんの人が募金してくれてうれしかった」と笑顔。鈴木智弘君（8）は「病院とかに行けなくて困っている人のために使ってほしい」と話していた。（松島　佳子）

スケート訓練

～無名のスカウト戦士の記念碑を訪問～

１月２３日の隊集会は、スケート訓練を実施しました。例年は、鶴川駅からバスで子供の国へ向かうのですが、今回は、津嶋副長の万全な下見により鶴川駅からこどもの国までハイクを決行。欠席スカウトも無く 13 人全員が参加。またＤＬの神岡さん（１組）、清水さん（２組）の他、７ 人のご父母も参加くださいました。

鶴川駅からこどもの国へ至る県道 139 号線は、交通量も多く危険です。生田駅～鶴川駅までの電車のマナー、

子供の国へ向かう際、ガードレールのないところも組ごと１列で車道に膨らまないように気を配り、安全ルールを守りながら計画書通りの約１時間ハイク。１０時３０分に子供の国に到着しました。

入場してから一路、スケート場を目指しました。入場前には、係員の方に安全と滑走ルールについて指導いただきました。①手袋をつけること、②逆走しない（反時計回り）、③３人以上で手をつながない等。また、靴の履き方・選びか方も教えてもらいました。準備運動も終え、森副長から安全

について再度指導いただき、ヘルメットを着用していよいよスケートリンクへ向かいます。慣れるまでは、手摺が友達。みんな慎重です。どのスカウトも転ぶことを恐れず、一生懸命です。スケートが始めてのスカウトや、苦手なスカウトも一人一人三浦コーチの丁寧な指導を受け、全員滑れるようになりましたね。

時間の経過と共に体の重心のかけ方や足の運び方をマスターし時間を忘れてスカウトが滑っている最中、デンリーダー、お母さん達は、カブブック・チャレンジブックのサインです。今年度より準備した「進歩壁掛けボード」の効果か、スカウト達の努力か、サインも多いようで、春キャンプまでには全員クリア章をＧＥＴ！期待できそうです。

安全ルールを実践し、けがもなく無事スケート訓練を終え、次は、『アンノウン・ソルジャー（無名のスカウト戦士）』のレリーフを訪れました。

レリーフの前で隊長が「レリーフを見て何かピンときた人いますか？」と質問すると、何人かのスカウトは「クリスマス会でリーダー達のやったスタンツといっしょだ！」と答えました。…「私が君に近づいた時、君は三指の敬礼をした。自分もかつては日本のボーイスカウトだった。ボーイスカウトは、世界の人すべてが兄弟だ。三つのちかいをあらわす三指を見て、スカウトとしての気持ちがよみがえり、兄弟であり、かつ傷ついている君を殺すことはできなかった。手当てをしておいた。一日も速く回復してほしいＧｏｏｄ　Ｌｕｃｋ！」…

イギリスからアメリカへボーイスカウト運動が伝わったきっかけは、名も知らぬ一人のイギリスのスカウトの小さな善行でした。この日本にも、三指から生まれた美しい話があるのです。

隊長のお話、心に届いたでしょうか。

名も知れぬ兵士の善行の話として、今でも伝えられており、「こどもの国」に記念碑が建てられています。スケート訓練の際に見に行く導入として、クリスマス会のリーダースタンツの題材としました。

昨年度の名も知れぬスカウトの善行の話、『アンノウン・スカウト』とともに、その精神は今でも広く知れ渡っています（若島副長）。

初代ボーイスカウト日本連盟総長の後藤新平の名言に「人のお世話にならぬよう。人のお世話をするよう。そして、報いを求めぬよう」という言葉があります。人の力になるために、普段からの心構えといざという時に勇気が出せるよう心掛けたいものです。

明日からは如月。梅の花が咲き始め、春の訪れが１歩ずつ近づいています。